

早稲田大学広報 通号189号

CAMPUS NOW

2010 新年号



08 SPECIAL REPORT

人とのつながりが生む 大学の社会連携 ～新たな価値を創造する～

Part.1 早稲田の知と社会をWin-Winの関係でつなぐ

Part.2 プロジェクトの実績に見る可能性

日産・早稲田プロフェッショナルズ・ワークショップ

西東京市プロジェクト「理科・算数だいすき実験教室」

中野区プロジェクト「経営・学び座なかの 経営パワーアップ塾」

Part.3 鼎談 人と人のつながりが生む大学と地域の新しい関係

18 第二世紀へのメッセージ

小説家

火坂雅志

20 プロ・ロゴグ

国際学術院 桜井啓子





秋の褒章および日本芸術院

本学教授に高い評価

2009年秋の褒章において、法学学術院の江頭憲治郎教授が「学術芸術上の発明改良創作に関し事績著明なる者」に授与される紫綬褒章を受章しました。江頭教授は「閉鎖的会社、商取引法といったマイナーな分野の研究が評価されたのだとしたら、斯学にとってうれしいかぎりです」と受賞の感想を述べています。伝達式は11月16日に執り行われました。

一方、12月15日、芸術活動に顕著な功績があったとして本学芸術学校の藪野健教授に対し、日本芸術院第一部（美術）会員の辞令が発令されました。藪野教授は、洋画「ある日アッシジの丘で」で2008年度日本芸術院賞を受賞。

今回の栄誉に「早稲田は人を生み、育む場だ。私が画家になったのも、安藤更生、坂崎乙郎、今井兼次の3人の教授との出逢いがあったからだと思う。表現



江頭教授



藪野教授

工学のような領域を越えた藝術表現の教育に尽力したい」とコメントしました。



優れた研究業績を顕彰

2009年度大隈記念学術褒賞を決定

創立者大隈重信を記念し、学術の振興をはかる目的で設けられた大隈記念学術褒賞において、研究上の業績が抜群であり、学術の水準の向上に寄与するところ極めて顕著とされた本学の

専任教員に対して贈られる「大隈記念学術記念賞」が、下記のとおり決定しました。授与式は10月20日、大隈会館にて行われ、白井総長より正賞と副賞が授与されました。

受賞のスピーチをする
大場教授

同、堀教授

氏名	研究題目
大場一郎（理工学術院教授）	量子論の基礎的諸問題の研究
白井克彦（理工学術院教授）	音声コミュニケーション科学の基礎研究とその情報通信技術への応用
堀 真清（政治経済学術院教授）	西田税と日本ファシズム運動

※白井教授の表彰は適切な時期に行われます。



中国・台湾の学生を本学大学院修士課程へ

頂新国際集団と奨学金制度を新設

10月21日に上海にて、魏應州頂新国際集団総裁や白井総長が出席して「頂新国際集団 康師傅控股有限公司奨学資金制度」の記者発表会を行いました。

本奨学金は中国の大手食品事業グループ頂新国際集団の支援を受け、中国・台湾の大学に在籍する意欲ある優

秀な学生を、早稲田大学の大学院修士課程正規学生として受け入れるための制度で、授業料や生活費として一人当たり約300万円を2年間給付するものです。これは本学最大規模の奨学金であり、日本への外国人留学生が申し込むことが出来る最高クラスの金額です。

第一期支給は2010年9月より開始。復



握手をかわす白井総長（左）と魏総裁

旦大学、上海交通大学、浙江大学、同济大学、上海财经大学、台湾大学、政治大学の7大学の約40名に支給します。将来的には中国・台湾全土の大学を対象に、5年間で425名程度を予定しています。



「WASEDA Next125」の推進力

ご支援いただいた皆様への感謝を込めて

本学は、教育研究の強化・充実をはじめとする様々な事業で多くの皆様のご支援、ご協力をいただいている。その真心に感謝申し上げるとともに、そのご期待に応えるべく、世界に存在感を示すことのできる大学を目指して邁進してまいります。

記念事業募金寄付者銘板を設置

11月1日、西早稲田キャンパス63号館（理工100周年記念館）に「理工学部創設100周年記念研究教育強化事業募金」にご協力いただいた方々を顕彰する銘板（写真）を設置しました。理工学部は2008年、創設

100周年を迎えて、記念募金として多くの方々から多大なご支援をいただきました。

また大隈講堂1階ロビーには「創立125周年記念事業募金」としては最後となる寄付者銘板を設置しました。これで、銘板に



刻まれたご芳名は最終的に個人21,232名・団体966件・法人1,496件となりました。

「WASEDAサポーターズ俱楽部エグゼクティブ・フォーラム2009」開催

1994年に設立された「早稲田大学後援会」が、本年度より「WASEDAサポーターズ俱楽部」にリニューアルされました。



議論が白熱したミニシンポジウム

同俱楽部は、「教育環境整備」「スポーツ支援」「奨学金」等の各種事業への財政的支援のため、年度会員として、毎年度一定額を寄付金として拠出していただき、本学から各種サービスを提供する寄付制度です。

11月20日には、同俱楽部特別会員（名誉称号贈呈者）の皆様を対象とした『早稲田大学をご支援いただいている皆様と

の集い－WASEDAサポーターズ俱楽部エグゼクティブ・フォーラム2009』がリーガロイヤルホテル東京で開催されました。出席者は、「政権交代－アジアを中心に見たこれから外交戦略」と題したミニシンポジウムに耳を傾けた後、大学役員や体育各部の部長・監督・選手も出席した懇親会で互いに親睦を深めるなど、早稲田の魅力溢れるひと時を満喫していました。



左から、大西氏、白井総長、土井氏、齊藤氏

ジャーナリズムの神髄に触れる 早稲田ジャーナリズム大賞贈呈式と 記念トークセッション開催

第9回早稲田ジャーナリズム大賞贈呈式開催

11月6日、第9回石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞の贈呈式がリーガ

ロイヤルホテル東京にて開催されました。今年度の受賞作品は次の通りです。

公共奉仕部門

- ◆長編ドキュメンタリー映画
『沈黙を破る』（土井敏邦）
- ◆『在日米軍基地の意味を問う』一連の記事及び
『在日米軍最前線～軍事列島日本～』（単行本）
(東奥日報社社会部付編集委員 斎藤光政)

文化貢献部門

- ◆写真集
『ロマンティック・リハビリテーション』（大西成明）

※草の根民主主義部門は該当なし

白井総長挨拶及び贈呈、鎌田慧選考委員の講評の後、受賞者からそれぞれのジャーナリズムに対する熱い思いが述べられました。

贈呈式に併せ、本賞記念講座をまとめた最新刊『可視化』のジャーナリスト（早稲田大学出版部）が発刊されました。

早稲田ジャーナリズム大賞記念トークセッション『一枚の写真が社会を変える』開催

DAYS JAPAN・本学共催の「フォトジャーナリズム・フェスティバル」期間中の11月29日、早稲田ジャーナリズム大賞記念トークセッション『一枚の写真が社会を変える～フォトジャーナリズムの現在～』が小野記念講堂で開催されました。本賞選考委員の写真家 田沼武能氏や、過去

の大賞受賞者2名もパネリストとして登壇し、映像ジャーナリズムの現状と課題について論議が繰り広げられました。

また、同時開催の企画パネル展『石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞の軌跡』でも、多くの方が本賞の歩みに興味深く見入っていました。





新しい時代、新しいタイプの文芸創作の力を評価

第2回早稲田大学坪内逍遙大賞を授与

近代日本文芸の父、坪内逍遙の業績をたたえ、文芸・芸術などの幅広い分野で貢献した人物・団体を顕彰する第2回早稲田大学坪内逍遙大賞の授賞式が11月13日、リーガロイヤルホテル東京で行われ、大賞の多和田葉子氏、奨励賞の木内昇氏の両受賞者が出席、受賞の喜びを語りました。

ドイツに拠点を置きながら日独2カ国語で作品を書き続け、世界中で700回

を超える朗読会を開催してきた多和田氏は「坪内逍遙といえば翻訳と演劇がキーワード。どちらも私の文学活動にとって、なくてはならない要素で、特にうれしい」。雑誌編集者を経て創作活動を始めた木内氏は「人の協力なくしてものは生み出せない。熱心な編集者を失望させないように、これからも1つ1つ作品を書いていければよいなと思います」と、ともに笑顔を見せました。



賞の贈呈に先立ち白井総長が挨拶

本賞は2007年、本学創立125周年を記念して創設されました。隔年で贈られる賞で、第1回は大賞に村上春樹氏、奨励賞に川上未映子氏が選ばれています。



学術交流、人材育成等の組織的連携を推進

サウジアラビア大使館と連携に関する覚書を締結

10月22日、サウジアラビア大使館と本学は学術交流・人材育成を主として、両者間の組織的連携を推進していくこと



トルキスター駐日大使（中央）と白井総長

で合意し、調印式を行い覚書を締結しました。

サウジアラビアと本学は、2006年4月に、サウジアラビア王国スルタン・ビン・アブドゥラジーズ・アールサウード皇太子殿下に本学名誉博士学位を贈呈したことを契機に、同年12月には白井総長が同国へ招待を受け高等教育機関や研究機関、政府機関を訪問し、関係構築の糸口となりました。その後堀口常任理事他が

同国を訪問、2008年6月には「サウジアラビア王国デー」を開催しました。

また、2009年9月には同国のジェッダでのアブドラ国王科学・技術大学(KAUST)の開校式が行われ、招待を受けた太田常任理事他が出席しました。

今後产学の連携を含めた学術・研究面での両者間の関係のさらなる強化や、アブドラ国王奨学金受給者をはじめとする本学での人材交流が期待されます。



日中友好に尽力した功績を振り返る

「周恩来と日本」写真展開催

10月28日から11月8日まで、「周恩来と日本」写真展が行われました。日本に留学していた青年時代の姿や、中華人民共和国の初代首相として現代日中関係史に残した足跡を示す写真や参考資料を展示し、日中友好に尽力した周恩来的功績を振り返りました。これからの日中友好を担う学生に、氏が果たした役割や人となりを紹介することは、日中国交正常化の軌跡を回顧し、今後の両国間の良好な関係を築くための良い機会になったことでしょう。

また、写真展初日の28日にはシンポジウムを開催。日中関係を一層発展させるために周恩来首相の功績から何を学び、いかにして両国間に信頼に基づく強い絆を築いていくことができるかを、同首相の通訳を務めた王效賢中日友好協



会副会長、毛里和子政治経済学術院教授などが議論。会場には村山富市元首相も姿を見せ、大盛況のうちに幕を閉じました。



東アジア共同体構築への歩みを期待

金泳三元韓国大統領特別講演会

10月27日、本学名誉博士（1994年3月授与）でもある金泳三元韓国大統領が来校し、小野記念講堂で講演されました。元大統領は、講演の冒頭、2008年に建国60周年を迎えた韓国の建国の礎を作った先人の中には、早稲田大学の出身者が多

かったことに言及。また今回の日本の政権交代にも触れながら、日本と韓国が必ず手を携えて東アジア共同体の構築に向け進むことへの期待を述べ、最後に与謝蕪村の俳句「二もとの梅に遅速を愛すかな」で講演を締めくくりました。



講演する金元大統領

※講演の全文は本学ホームページ

<http://www.waseda.jp/jp/news09/091027.html>でご覧いただけます



歌舞伎の本質を実演と共に

市川團十郎氏講演会開催

欧州委員会（EU）主催で本学が企画運営している「第27期EUビジネスマン日本研修プログラム（ETP）」の一環で、市川團十郎氏の講演会が11月4日に大隈タワー多目的講義室で開催されました。歌舞伎会の重鎮である氏は、これまでパリのオペラ座や最近ではモナコ公演など欧州公演も積極的に行っています。今回は『欧州公演と日本の伝統文

化』と題して、歌舞伎の本質とは何かを実演を交えてわかりやすく説明いただき、また欧州公演の経験も踏まえて異文化理解とは何かを独自の視点でお話いただきました。

見えないところにこだわることが日本人にとっては重要であることを、歌舞伎での事例とトヨタ自動車の事例を合わせて紹介するなど、幅広い見識に基づ



熱心に耳を傾けるヨーロッパのビジネスマンたち

いた示唆に富む話を熱意を持って語られ、参加したETPの研修員たちからも活発な質問がありました。特に團十郎氏が伝統的な枠組みを守りつつ、時代性を反映させた革新性を歌舞伎に取り込むことを目標にしていることは多くの研修生の印象に残ったようです。



“人間としての資質が指導者には必要だ”

第43代米大統領ブッシュ氏トークイベントで語る

第43代アメリカ合衆国大統領ジョージ・W・ブッシュ氏によるスペシャルトークイベント「アイク生原&ピーター・オマリー記念スポーツマネジメント講座&グローバルCOE “アクティブ・ライフを創出するスポーツ科学”採択記念講演会」

が、11月4日、井深大記念ホールで開催されました。

アメリカ大リーグ・テキサスレンジャーズの共同オーナーを務めたこともあり、スポーツ全般に造詣の深いことで知られるブッシュ氏は、自身の経験を交え、

チーム経営のノウハウなどについて講演しました。質疑応答で、学生から「アメリカ大統領は、いわば世界のリーダー。リーダーに必要な条件は?」と問われると、「眞実を語り、原則を示し、人気のために信念を曲げないこと。政治・スポーツに限らず、人間としての資質が指導者には必要だ」と語りました。

クロージングセレモニーでは、ブッシュ氏へのプレゼントとして、第43代大統領にちなみ袖に“43”的入ったベースボールジャンバーが贈呈されました。



前大統領を囲んでの記念撮影

A

文化の秋、スポーツの秋を満喫

各種フェスティバルが盛大に催されました

秋もたけなわの10月、11月、文化、スポーツの祭典が次々と開催されました。まずは10月19日～11月5日の「オール早稲田文化週間」。講演・展示・演劇等々約20企画が開催されました。

続く11月6日の「体育祭」(写真左下)では、総長杯を争う13種目の競技と7種目の体験教室が行われ、約3,000名の学生・教職員が参加しました。予選で120チームを集めたフットサルや、三田の慶應義塾大学から本学まで東京6大学を辿るウォーキング(10月24日実施)などは、学生が企画から運営まで大きく貢献しました。

さらに11月7～8日は「早稲田祭」(写真上)。学術発表からエンタテイメントまでの414企画に、約16万人が来訪。参加団体の学生はもとより、500名近い学生運営スタッフはフル回転。ごみの9分別に取り組むなど全国有数の環境対策にも取り組みました。

そして11月23日、本誌盛夏号でも既報のDAYS JAPANと本学共催の「フォトジャーナリズム・フェスティバル



大隈講堂前特設ステージでのオープニングフェスティバル



お天気にも恵まれ白熱のプレー（東伏見キャンパスサッカー場）



民族楽器バンドウーラを奏で、悲劇を乗り越えていく希望を歌うウクライナの歌手ナターシャ・グジー氏。
6歳の時、 Chernobyl 原発事故で被爆
写真提供=DAYS JAPAN

を通し、今を生きる若者たちにメッセージを送りました。写真展や講演、シンポジウムなどが連日のように開かれたコア期間は12月5日で終了しましたが、各種のイベントが2月まで続きます。

R
RESEARCH & EDUCATION

未来への架け橋を目指して

W-BRIDGE 1周年シンポジウム開催

11月28日、早稲田大学とブリヂストンの連携プロジェクト「W-BRIDGE」の1周年記念シンポジウム「未来への架け橋を目指して W-BRIDGE 1年の成果と今後」が開催されました。同プロジェクトは、地球環境分野において、従来の「産」「学」の連携に「地域の生活者」の連携を加え、架け橋となる研究・活動の支援を目的に活動しています。

シンポジウムでは、国立環境研究所特別客員研究員の西岡秀三氏と、茨城大学学長特別補佐の三村信男氏が基調講演を行い、地球環境問題という観点から、私たちの生活や大学のあり方などを論じました。W-BRIDGEが支援するプロジェクトの成果報告も行われ、東南アジアでの荒廃地の緑化によるCO₂吸収とバイオ燃料生産の実証的研究について、



担当者らが報告するなど、次世代に向けた様々な研究と活動が紹介されました。



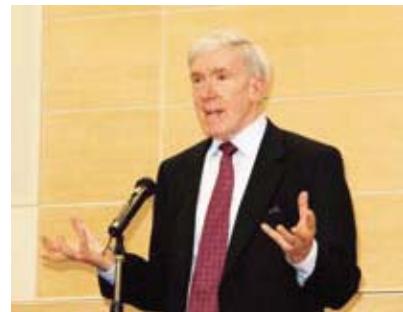
『日米間の極めて強固な友情』の重要性を強調

ホーマツ米国務次官が未来を生きる学生にエール

11月16日、アメリカの経済・エネルギー・農業担当国務次官ロバート・D・ホーマツ氏が「新たなグローバル経済における日米のリーダーシップ」と題した講演を大隈小講堂で行いました。氏は、講演の中で世界経済や金融システムのトレンドについて言及。地球温暖化回避や代替エネルギー開発といった未来への課題、

さらには、未来を生きる若者に望むことなどについて語りました。

講演の最後に「みなさん、素晴らしい機会を持った国際的な世代であり、君たちの手の中に日本、アジア、そして太平洋の将来がある。ご清聴ありがとうございました」と締めくくると、会場を埋めた約200名の学生から盛大な拍手が送されました。



共同原子力専攻の開設へ向けて

「未来エネルギーフォーラム」開催



大学院先進理工学研究科共同原子力専攻の来年度開設を記念して「第2回未来エネルギーフォーラム」が、11月11日に西早稲田キャンパスで開催されました。「低炭素社会実現のための原子力の役割と人材育成」をテーマに、同専攻を共同設置する東京都市大学の中村英夫学長の挨拶や石田徹資源エネルギー庁長官の祝辞、近藤駿介内閣府原

子力委員会委員長（東大名誉教授）の基調講演などに続き、多様な発表・展示が行われ、新専攻への期待の高さを感じられる会となりました。

共同原子力専攻は修士課程・博士後期課程とも2010年4月開設予定で、社会人・リカレント学生は現在出願受付中、一般入試・飛び級入試（ともに2月実施分）は1月に受付となります。



企業間共有情報の漏えい対策技術を共同開発

電子ファイルや印刷物などの漏えい経路が追跡可能に

小松尚久理工学術院教授の研究室は、岡山大学、日立製作所、日本電気、NECシステムテクノロジーと共に、複数の組織で共有する電子ファイルや印刷物などの情報漏えい対策技術を開発しました。

企業の情報は、社内で漏えい対策をしても業務委託先企業から漏えいする場合があるので、複数の組織の共有情

報の漏えい対策が必要です。今回開発された対策技術のポイントは「履歴管理」。業務効率は落とさずに、情報の操作履歴を確実に取得・管理することができ、万が一、情報漏えい事故が発生した場合も、どの組織から情報が漏えいしたのかを迅速に特定することで、情報漏えい拡大などの二次被害を最小限に抑えることが可能となります。



メディアの注目を集めた記者発表会



人のつながりが 大学の社会連携

～新たな価値を創造する～

Part.1

早稲田の知と社会をWin-Winの関係でつなぐ

大学の社会連携の現状と課題について、社会連携担当の谷口邦生理事に聞きました。



早稲田大学理事 谷口邦生

[プロフィール]

たにぐち・くにお

早稲田大学第一文学部卒業と同時に、職員として入職。94年ボストン大学教育学研究科修士課程修了。国際部・教務部・文化推進部の各事務部長、社会連携推進室長を務め、09年12月より総長室長。08年から理事（現在に至る）。

大学のあり方を見直した時 社会連携の新しい形が見えた

――大学が社会連携に取り組む目的と意義は何ですか。

大学の基本的な役割のひとつは、学生を教育して社会に送り出すことです。日本では、1992年をピークに18歳人口が減少に転じる一方で、大学に対する社会からの要請や期待が変化してきました。ビジネスをはじめとする様々な分野の国際化が加速され、日本の国際競争力の基盤となる教育、研究の高度化が求められるようになりました。大学教育のあり方を根本から問い直す、こうした変化が、大学間の連携や協力を必要とするようになったと思います。

世界に目を転じてみると、米国では80年代から大学間のコンソーシアムが結成され、お互いの施設の利用から大学間の連携が始まりました。日本では、90年代後半からカリキュラムの充実を目的に大学連携がスタートします。早稲田大学でも2001年度から近隣の4大学と「f-Campus」という単位互換制度を設けています。

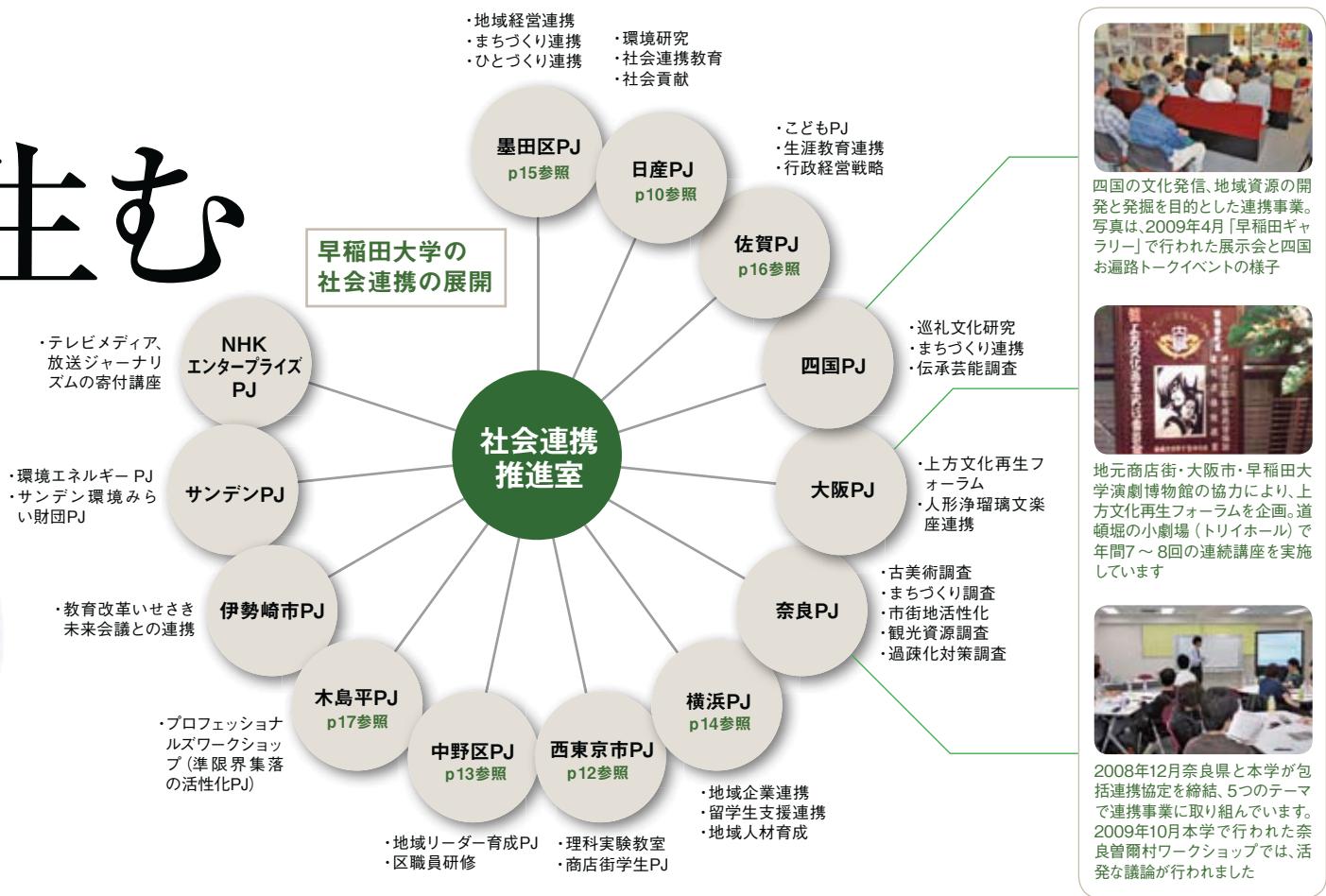
また、学生の教育プログラムにおいても、1990年代後半からインターンシップが盛んになり、ボランティア活動も単位化されるよう

なりました。従来、大学はアカデミックな教育と研究によって評価されてきましたが、現在ではこれに加えて、社会での体験を通じて、自分の力で考え、行動し、問題を解決することの出来る人材を育成することが求められています。大学の社会貢献力のひとつが、現実の社会を構成する企業や地域に学びながらその成果を社会にお返しすることです。このような視点から、大学の教育力が、「社会とともに存在する」新しい仕組みを構築することが必要なのです。

早稲田大学では、1996年に社会連携推進室の前身となる学外連携推進室が発足しました。当時、私はこのセクションの課長でしたが、文部省以外の通産省、郵政省等からの補助金獲得や理工系教員に比べて研究費を獲得しにくい文系教員をサポートすることが主な活動でした。現在、社会連携推進室は、大学内のさまざまな箇所が取り組む社会との連携活動を集約し、外部からの窓口として企業や行政と教員をつなぐ触媒としても機能しています。

大学総体として、社会に開く大きな窓口を設置することで、個々の教員や箇所レベルでの試みが早稲田大学として展開する「社会連携」の取り組みになります。本学の各箇所で行われる点の活動が、線や面として展開できる可能性が広がるのです。

生む



早稲田らしい進取の精神で 社会とともにある大学へ

早稲田大学の社会連携の特徴は何ですか。

早稲田大学では、社会連携の目的を「大学が持つ“知”という資産を社会（国や自治体などの行政、企業、地域、他の教育機関、海外）とつなぎ、Win-Winの関係で新たな価値を生み出すこと」と定義しています。学生の教育や研究に役立つというメリットがあれば、あらゆる連携が可能です。

本学は、昔から門がない大学と言われており、社会に開かれた大学でした。明治時代には、講義録を作り、全国の学びたいすべての人々に早稲田大学の教育を提供していました。一方、以前は地方から多くの学生が集まる全国型の大学でしたが、現在では、学生の7割弱が首都圏から集まっていることもあります。地方においては存在感が低下しています。人々に支持され、期待される大学を目指すためにも、社会とともにある大学であることを目に見える形で広く示さなければなりません。

早稲田大学の社会連携の特徴は、全国に連携先があり、多様性に富んでいることです（図参照）。グローバル企業である日産自動車との連携プロジェクトもあれば、地方の小さな村との取り組みもありますし、墨田区と中野区の中

小企業経営者をつなぐプロジェクトも進行中です。もともと早稲田大学には新しいことに積極的に挑戦しようという進取の精神の伝統があり、幅広い取り組みを後押ししています。

大学の社会連携を 当たり前のこと

早稲田大学が社会連携をさらに進めいく上で課題は何ですか。

ひとつは、連携先との人的交流などを通して、活動の土台を拡充することが必要だと考えています。ポイントは、職員の、現場を知り、現場を動かすコーディネート力です。多忙な教員が社会連携の取り組みに参加していくためには、企画や調整役を担うコーディネータを育てることが不可欠です。

現在、プロフェッショナルズ・ワークショップ等のプロジェクトでは、公募で集まった若手職員がチームを組んで教員と連携し、学生をサポートしています。コーディネート力養成のための基本的な研修も行いますが、実践を通して職員の能力も鍛えられています。職員にとっては学生との接点もあり、やりがいを感じられる新しい仕事だと思います。社会で存在感を持つ大学になるためには、職員一人ひとりがこれまで以上に力を発揮してい

かなければなりません。

もうひとつは、より多くの学生や教職員が社会との関わりを持つ機会を増やし、次のプロジェクトが生まれるようなきっかけを作っていくことです。たくさんのプロジェクトが生まれ、組織内で相互にノウハウを共有し、教育、研究活動に社会連携を組み入れていく循環を作っていくなければなりません。世の中で早稲田大学のこうした活動がプレゼンスを高めていくためには多くの時間がかかるでしょう。だからこそ続けていくことが大切です。

さらに、社会が人との関わりで成り立っていることを考えると、テクノロジーばかりではなく、早稲田大学の持っている人文科学や社会科学系のリソースを社会に役立てる方法はたくさんあると思います。それが出来れば、ただ拡大成長するという従来の発展のあり方とは違う、親密で柔らかな発展に貢献できるかもしれません。

早稲田大学が目指す社会連携の形とはどのようなものですか。

かつて象牙の塔と言われた大学のオープン化が進み、社会連携の取り組みがもっと当たり前のことになるとだと思います。資金がなくても、知恵とやる気次第でできることはたくさんあります。大学と社会との関わり方は、今後ますます変化し、拡大していくのではないでしょうか。

プロジェクトの実績に見る可能性

早稲田の社会連携は実際にどのように行われているのでしょうか。

「Win-Win の関係」とはどんなものか。それぞれの現場から探ります。

Pickup 1

企業・学生・職員・教員が 四位一体となって課題に取り組む

日産・早稲田プロフェッショナルズ・ワークショップ

日産自動車株式会社（以下、日産）と早稲田大学は、2006年2月に締結した組織的連携に関する覚書に基づき、自動車関連技術に関する共同研究を進め、人材交流、社会貢献の分野でも協力をしてきました。その事業のひとつ「日産・早稲田プロフェッショナルズ・ワークショップ」の実績と、大学と企業、それぞれの立場からの声をお伝えします。



プロフェッショナルズ・ワークショップとは、2007年より実施されている企業と大学が共通の目的を持って学びの場を創出する、実践型産学連携教育のプロジェクトです。現在、7社と連携、同ワークショップを行っており、企業側は大学の知的財産や学生の生の声をマーケティングに生かして、問題解決に活用し、大学は仕事観、コミュニケーションスキルの向上など、学内だけでは得られない教育の場とするWin-Winの関係を構築しています。

同ワークショップとして初めての実施の一つで、今年で3年目となるのが「日産・早稲田プロフェッショナルズ・ワークショップ」。2007年は、



2008年1月には日産社長兼CEOのカルロス・ゴーン氏、本学白井総長などを前にプレゼンテーションを行いました

日産の人事部と公募によるグループが、「理工系女子学生へのリクルートメッセージの開発」、また商学部・恩藏直人教授のゼミ2グループが、日産市場情報室と「若者のクルマ離れ分析と打開策」「日産が目指すべき営業方法とは」という課題に取り組みました。

2008年1月には日産社長兼CEOのカルロス・ゴーン氏と本学白井総長の前でプレゼンテーションを実施し、高い評価を得ました。日産内でも情報が共有され、2009年の東京モーターショーに出品されたコンセプトカーに、学生と日産社員の論議で出てきたアイデアが一部活かされるなどの実績を上げています。

2年目以降も、前述の恩藏ゼミ生が同ワークショップに参加。3回目となる2009年に日産から出された課題は「次世代のクルマ文化/モビリティ」です。6月22日に行われたキックオフミーティングでのファーストプレゼンテーションを皮切りに、7月の日産の施設見学、8月の中間報告会、9月の最終報告会、10月の役員報告会に至る



2009年役員報告会。日産役員、担当者、恩藏教授とゼミ生まで、10数回にわたり、日産との討議、学生へのフィードバックなどを経て、発表内容の質を高めました。

「日産・早稲田プロフェッショナルズ・ワークショップ」をはじめとした同プロジェクトは本学のNext125事業としても位置づけられ、若手職員が進捗管理などの業務に深く関わっています。

同プロジェクト運営スタッフで「日産・早稲田プロフェッショナルズ・ワークショップ」の担当、國分勝さん（戸山総合事務センター所属）は、次のように話します。

「日産とのワークショップでは、2年目、3年目と

大学内では得られない経験が財産。他の学生たちにももっと刺激を与える



商学院
恩藏直人教授

「プロフェッショナルズ・ワークショップ」は、学内では得られない、ビジネスとの接点という新しい教育の場を提供するというのが大きなねらいのひとつです。「日産・早稲田プロフェッショナルズ・ワークショップ」は、2007年から私のゼミの3年生が参加してきました。

学生たちは同ワークショップを通じ、目覚ましく成長します。何度もトレーニングを重ね、人前で堂々と、かつ論理的に話せるようにな

る。さらに、幅広い年齢層の社会人とのやりとりを通じ、新しい世界を知ることができます。

また、企業から課題を与えられ、自分たちで資料探し、文献に当たるなど、期限が定められた中で知的作業を共同で進め、意見のすりあわせを行います。その中でグループ内の自分の役割も見つけ、時にはけんかなども経験しながら、最終発表まで内容を固めていきます。同ワークショップの初年度は、私も



人とのつながりが生む
大学の社会連携

役員報告会では、プレゼンテーション能力のアップも目
覚ましい、という評価も得ました。写真は07年度のもの



多くの学生が参加してきましたが、当然のことながら学生の個性は、毎年一人ひとりまったく違います。そのような状況でも学生の成果物の仕上がりが思わしくない時には、一人ひとりの学生と向き合い、その原因を探り、企業側の進捗に問題が生じた場合は、企業側の話を聞き調整を図るなど、大学（学生）と企業双方にもっとも利益が生まれ出される着地点を常に見出していきます」

また、同スタッフの一人、本学教務部教務課所属の大野佳祐さんは、「大学が一体となり箇所横断的にプロジェクトを運営していきます。これは今までになかった取り組みです。いつも“学生”という大きな森だけを見ていた職員が、葉の一枚、一枚を見るように一人ひとりの学生と関わっていく、という点にやりがいを感じますね」と話します。

本学では今後、さらに多くの学生に教育の機会を創出するため、1つの企業に2、3のゼミが提案をするなどの試みを2010年度から試験的に実施し、同プロジェクトの一層の活性化を図っていく計画です。

しばしばコミットし汗を流しましたが、2年目以降は、先輩たちが得た知識を後輩に伝えてくれました。これら一連の流れが得難い経験となり、社会人として好スタートを切るために土台となる、と考えています。

大学として、学生のこのような活動について、もっと情報を発信し、他の学生にも刺激を与えていくことが課題だと思っています。

早稲田をハブに、企業合同で論議する場を



日産自動車株式会社
IPプロモーション部
曾根公毅部長
(1975年早稲田大学理工学部卒)

「日産・早稲田プロフェッショナルズ・ワークショップ」は、日産が社会貢献の3本の柱としている「環境」「人道」「教育」のうち教育面での事業の一環です。

日産が実際に直面している問題について、学生の目線、ニュートラルな立場、さらにマーケティングのプロである恩藏先生の指導も経た提案は、日産にとって非常に有益なものでした。とくに、車を開発している現役の社会人が考えている車像と、若者の車像のギャップについて分かったことは成果の一つです。たとえば今年の発表にあった“クルマに関するときめき”について。安全運転やエコに気を使った運転などにときめく、人とのつながりに重点を置く、といった意見に、我々の世代が「SKYLINEに乗ってかっこいい」と感じていた感覚は通用しないのだ、と身につまされるものが多くありました。

2009年は日産の「社会フロンティア研究所」が5ヶ月に渡って、熱心にやりとりを重ね、討議を行い、プレゼンテーションでの話し方



中間報告会では、日産担当者と熱心な討議が行われましたなども徹底的に指導しました。6月のファーストプレゼンテーションと10月の役員報告会の内容を比べると、質のレベルアップは歴然です。

早稲田の校歌の中に「現世を忘れぬ 久遠の理想」という詩があります。その意味どおり、学生の皆さんには、足下を見て、自分を見つめながら、自分の目指す将来像にどうしたら近づけるかを早稲田にいる間に考えて欲しいと思っています。そのような点からも、このワークショップは意義があるのではないかでしょうか。

早稲田ではさまざまなプロフェッショナルズ・ワークショップが行われていますので、今後、早稲田をハブにし、それらの企業合同で、より意義深いプロジェクトの実現に向けて論議する場を設けてはどうか、と考えています。



学生の声 グループワークの大切さを知る

商学部3年 恩藏ゼミ 落合由起子さん

このワークショップに参加したのは、他の学生ではできない経験を積むことができ自分の成長に必ずつながると思ったからです。

実際、自分たちの考えを形にしていくことはとても大変なことでした。班内で意見がまとまらず、先に進めないことも何度かありました。その度、お互いが納得するまでとことん話し合いで、周りからもアドバイスをいただき、一歩一歩進んでいました。話し合いではメンバーの考えを深く知ることができ、非常に刺激を受けました。最後に企業トップの方の前で成果発表するというとても貴重な経験をさせていただきました。

この活動を通じ、一つのものを作りあげる大変さ、グループワークの大切さを学ぶことができました。意見を合わせ一つのものを作っていく作業は簡単なようでとても難しいことです。このことが実際に達成でき、私にとってとても自信になりました。

今回の経験で得たことを忘れず、これから的生活に活かしたいと思います。

Pickup 2

“知の連動”を外に広げ、 学内の活性化に

西東京市プロジェクト「理科・算数だいすき実験教室」

西東京市との連携で、教育・文化・スポーツなどの分野において、地域社会の発展と人材育成に貢献することを目的としたプロジェクト。その一環として行われ、地域の父母や小学生から好評を得ている「理科・算数だいすき実験教室」の模様をお伝えします。

2 007年、社会連携推進室の発足とともに、早稲田大学と西東京市および市教育委員会の連携事業としてスタートした「理科・算数だいすき実験教室」。早稲田大学高等学院（以下高等学院）の協力のもと、楽しい実験や授業を通して、子どもたちの理科・算数への興味を引き出すことを目的に行われています。また、高等学院は、2006年度よりスーパー・サイエンス・ハイスクールに指定されており、そうした国の支援を地域に還元することも目的としています。

「理科・算数だいすき実験教室」は、西東京市在住の小学生を対象に実施され、小学校ではなかなか実現できない実験体験や高等学校教諭の幅広い知識に基づいた授業を受けられることが、他にはない実験教室として人気を集めています。一方、高等学院にとっては、西東京市との連携により小学生と接することで“知の気づき”があり、また、“知の連

動”を外に広げることにもつながっています。

実験教室に参加した保護者からは「学校で体験できないことをさせてもらえるのはありがたい。今後、このような機会があれば、ぜひ参加させたい」「先生の話が面白く、子どもだけでなく私も楽しんだ」といった感想が寄せられています。

8月1日、授業参観に訪れた西東京市の坂口光治市長は、「いつもと違う環境で素晴らしい指導者ののもと、保護者と一緒に実験をすることは、子どもたちに良いインパクトを与える。今後も垣根を低くして、社会連携を進めていければ良いと思う」と述べました。

実験教室は、年々内容を拡充しています。高等学院の橘孝博教諭と柳谷晃教諭は「私たちちは伝道師。一人でも多くの子どもたちが理科や算数が面白いということに気づいてもらえるように、種を蒔いていきたい」と今後へ大きな期待を抱いています。



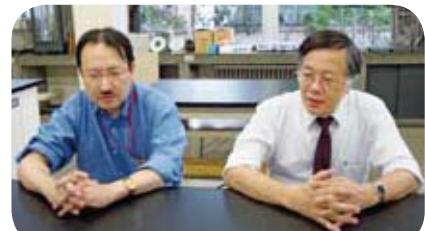
先生が液体窒素で瞬間冷凍したゴムボールを床に落とすと粉々に！その後も子どもたちが家から持ち寄ったいろいろなものを瞬間冷凍して観察しました



顕微鏡でプランクトンを観察。学生が子どもたちの実験をサポートしました



授業参観を楽しむ坂口光治西東京市長（後列中央）



実験教室のやりがいを語る柳谷教諭（左）と橘教諭



ペットボトルで水ロケットを作って校庭で発射。想像以上に高く遠くへ飛びました

Pickup 3



大学が地域と地域を結ぶ 新たな連携の形

中野区プロジェクト「経営・学び座なかの 経営パワーアップ塾」

中野区内で稼動予定の「国際コミュニティプラザ（仮称）」の設置に先立ち、行政および地域社会と連携した異文化共生型全人教育と地域貢献を目指し進めている中野区プロジェクト。同プロジェクトの一つ「経営・学び座なかの」において、本学とかねてから連携事業を行っている墨田区とのネットワークが作られています。

2 008年より中野区と早稲田大学の連携により、「経営パワーアップ塾」を開講しています。これは、中野区が中野区の事業所経営者または経営幹部の方を対象に、2006年から実施している経営に関する講座「経営・学び座なかの」の一環で、全5回の講座を通して人材育成を行っています。講座が目指しているのは、経営者同士のコミュニティが生まれ、産学官の連携によって人材育成と輩出の仕組みを構築すること。2年目の今年も目標達成に向かって、「経営資源である人材を育てる魅力的な経営者を育成する」「区内中小企業の活性化を図ると共に、経営者同士が高め合い、気軽に相談し合えるようなネットワークをつくる」ことに重点を置き、全5回の講座が設けられました。昨年に引き続き理工学術院の友成真一教授や墨田区の深中メッキ工業株式会社の深田稔社長らを講師に招き、知識を学ぶだけでなく、経営者同士のネットワークが醸成されています。

10月21日に行われた第3回講座のテーマは「墨田区の経営者との交流を通じて経営を考える」。友成教授による講義の後、徒歩で墨田区の中小企業を3軒訪問しました。工場の見学と経営者との意見交換を通じて経営者



江戸小紋を製造する大松染工場を見学。受講者の皆さんは伝統工芸の技に感心していました

が元気で頑張っている理由や自分に足りないことを考え、その後の懇親会では徹底的に議論を交わしました。

深田氏は「受講者が回を追うごとに積極的になり、仲間意識も芽生えてきました。人材育成のために、数年前から墨田区で実践してきたノウハウを中野区に取り入れることは合理的で、大学というハブがなければ実現で

きなかった。早稲田大学が軸となることで継続性も期待できる」と連携事業の手応えと今後の期待を語っています。

大学が、地域と地域を結び、地域を活性化するという新たな役割を担い始めました。

墨田区の案内役を
担った深中メッキ工
業株式会社の深田稔
社長



有限会社大里化工の工場で、プラスチック
移出成形の仕組みを聞きました



「経営者を経営する」と題して、講義をする友成教授



プラスチック加工業の有限会社サンテックの工場で、
社長に質問大会

鼎談

本学の社会連携事業の中でも、大学と地域の連携は、社会における大学のあり方を変えるさまざまな可能性があります。その現状や課題について、大学と地域、それぞれの立場から意見を交換しました。

人と人のつながりが生む 大学と地域の新しい関係

地域を元氣にする 大学という資源

奥山 本日は大学の社会連携事業の中でも、特に地域の連携について、それぞれの立場から現状や課題について語り合いたいと考えています。吉田さんが事務局長を務めている横浜企業経営支援財団（以下IDEc）は、全国の大学と連携をしていますが、その目的は何ですか。

吉田 IDECは横浜市の外郭団体で、市内に10万7千ある中小企業を支援し成長発展させることを使命としています。ちなみに、3年前に市からの補助金を5年後にゼロにするという通告を受け、改革を進めた結果、5億円削減しました。しかし一番重要なことは、コスト削減よりも市内の企業に質の高いサービスすることです。100年に一度の経済危機と言われていますが、企業が存続していくためには、絶えざるイノベーションが必要で、そのためには情報が必要です。そこで、地元の銀行だけでなく、グローバルな情報も持っているメガバンクと提携し、それから「知」の宝庫である大学との連携を始めました。

横浜市内には理工系大学が9つあります。従来の理工系の産学官連携はそれらの大学で良かったのですが、近年ニーズが高まっているバイオやアグリなどの分野をカバーする農学部や水産学部を擁する大学はありません。そこで、全国の国立大学とも連携し、2007年からは私立大学でも、東海大学を皮切りにネットワークを全国に広げていきました。早稲田大学との連携は県外初です。早稲田のような総合大学との連携では、大学の「知」だけでなく、卒業生とのつながりができることも期待しています（※下段1）。

友成 私が25年間中央官庁で仕事をしていたときに考えていたのは、どうすれば日本を元気にすることができるかということでした。失われた10年と言われた時代から日本は元気ありません。それならまだ使われていない資源を掘り起こそうと目をつけたのが、大学、地域、行政です。

国の競争力ランキングでは、フィンランドなどの小さな国が上位に並びます。天然資源に乏しい小さな国であっても大学の資源を活用し、人的資源を十二分に利用しています。日本も同じような状況ですが、大学の資源が十分



友成真一
早稲田大学 理工学術院
環境・エネルギー研究科教授
地域経営ゼミ担当

に活用されていません。

日本でもこの10数年来、理工学分野の産学官連携が盛んに行われてきましたが、一部を除き目覚ましい成果は出ていない印象を受けます。理工学分野は大学の資源のごく一部に過ぎません。もっと大学をフル活用するなら、最大の資源である学生の力を活用すべきです。

また、地域の資源ももっと活用すべきです。大学と地域をうまくぶつかり合わせてお互いの資源を相互に利用すれば、世の中はもっと面白くなると期待しています。

奥山 本学が本格的に地域連携を始めたのは、2002年の墨田区との包括協定です。私は大学職員を30年以上やってきましたが、最初は、大学が地域や企業と連携するということがよく分かりませんでした。運良く、友成先生からいろいろな示唆をいただくことができたので、本当に助かりました。墨田の包括協定は、形式上は総長と区長の間で結ばれましたが、実際は区の中小企業センターの方と大学の産官学連携推進センターの職員が、双方のカウンターパートとして熱心に動き、2人の間で化学反応を起こしながら新しいアイデアを生むことによって、お互いの資源を生かすことの

1. 横浜プロジェクト

横浜市内地域企業の人材養成と早稲田大学学生のキャリア形成の両面にわたる連携を、地域資源の活用を図りつつ実施することを目的として、2008年7月に横浜企業経営支援財団（IDEc）と「横浜市の中小企業の支援等に関する基本協定」を締結しました。

現在、横浜経済の持続的発展・成長に向けて、主に地域経済活性化の源泉である市内中小企業の人材育成に関わるシステムづくり「ヨコハマ次世代経営塾」、アジアを中心とした海外の機関・団体、大学等と連携した企業経営支援、大学教授による財団事業への協力やアドバイス等の取り組みを行っています。



ヨコハマ次世代経営塾で、さまざまな業種の経営者が集まりました



吉田正博氏
財団法人 横浜企業経営支援財団
常務理事 事務局長



現実の課題を受け止める感性を育てることが、大学の教育に求められていると思います。

奥山龍一
早稲田大学教務部
社会連携推進室副室長



プロフィール

よしだ・まさひろ（中央）
早稲田大学商学部卒業後、横浜市入庁。経済政策課長、経営支援課長、産業金融課長を歴任し、現在、財団法人 横浜企業経営支援財団 常務理事 事務局長。

ともなり・しんいち（左）

京都大学大学院工学研究科修了。通商産業省（現経済産業省）入省。通産省ロシア東欧室長、国土交通省企画官等を経て07年より現職。

おくやま・りゅういち（右）

早稲田大学第一文学部卒業後、職員として入職。体育局、事務システム開発課、人事部勤務を経て、現職。

写真=金子悟

できるさまざまプロジェクトを進めていったと聞いています（※下段2）。

友成 そうですね。墨田との包括協定も当初は理工系のものづくりを想定していたようです。しかし、白井総長が「墨田との連携は、まちづくりだ！」とおっしゃって、プロジェクトの幅が広がりました。そして何といっても、連携を進めるのは人です。包括協定は所詮紙切れ一枚の世界ですが、双方のカウンターパートが、自分のところの資源をよく理解し、組織をまとめていく能力を持っていれば、必ずうまくいくと思います。



奥山 その後、墨田との連携をお手本にしながら、私が関わったもので言えば、本庄市や川口市、佐賀県、奈良県、今日参加している吉田さんのIDECとも協定を結びました。企業では日産自動車やNHKエンタープライズなどと協定を結んでいます。世の中全体の流れとしても、従来型の理工学系から、文系や農学など新しい領域へと連携の幅が広がっています。今、地方の大学がどのような地域連携を行っているのかを調べているのですが、大学が地域との関わり方をとても大切にしていて、いかに地域にとって有用な人材を育成するか、地域のニーズをいかに受け入れるかという考えを持っていることが分かります。特に地方の中小大学では、それが大学の存在理由であり、生き残る道なのではないかと感じています。

友成 その調査では、大学と地域の連携が成功している要因を探ろうとしているのですが、世の中は、形だけを見ようとする傾向がありますので、その成功の要因を掘り下げて見ないと議論が表層的になってしまいます。深い成功の要因を横に展開していけば、もっと上手に大学の資源を使うことができると思います。

奥山 成功している大学の地域連携は、教員だけでなく学生、職員も積極的に動いていて、自治体や商工会議所や商店街ともよい関係を築いています。良い人間関係が推進力になっているのは確かですね。吉田さんは、北海道から九州まで大学を訪問し、数十校と協定を交わしていますが、その辺はどうお考えですか。

吉田 まったくその通りですね。連携を推進する鍵は、キーマンをどう育てるかだと思います。大学によっていろいろなパターンがありますが、地域連携に熱心な先生や職員がいる大学はうまくいっていますね。ただ、地域連携のやり方は、早稲田のように学生数が多くグローバル展開をしている大学と、地方の学生が数千人の大学では、違ってくると思います。

奥山 地方の大学にしても首都圏の大学にしても、自分の大学があるローカルを大切にするという視点と、グローバルに展開するという視点がありますね。私が佐賀県との協定を担当して感じたのは、自分たちが思っている印象と外からの印象は違うということです。佐賀県は大隈重信の出身地ですから、早稲田のブランドは通っているだろうと信じていたので

2. 墨田区プロジェクト

墨田区を大学の擬似キャンパスとして位置付け、実学の場として墨田区の資源を活用していくといった理念のもと、2002年12月に「包括的事業連携協定」を締結。連携事業として、墨田区内の中 小企業を中心に創設された「すみだ産学官連携クラブ」の新製品・新技術開発プロジェクトが開始されました。また、早稲田大学の研究室等と連携し、「すみだ」をテーマにした文化やそこに生活する人々のコミュニティについての講演や勉強会を実施する「多文化共生セミナー」、早稲田大学のゼミ学生が中心となり、地域の企業や人々と直接触れる中で、さまざまな地域の問題について意見を交換し、解決のためのプロジェクトを企画・実行する「地域経営ゼミ」、その他次世代の「ひとづくり」のための「起業家教育（アントレプレナーシップ）」や「Do School in 神泉」といった区内小中学生を対象にした早稲田大学発ベンチャー企業との連携事業も行われてきました。



地域経営ゼミの学生がプロジェクト運営にあたりました

人と人のつながりが生む大学と地域の新しい関係

ですが、実際、佐賀では大隈重信より江藤新平のほうに人気があり、早稲田大学は都会の大学というイメージくらいしかないです。そこで、連携講座を開催したり、地元新聞への露出度を増やしたりして、大学の魅力を伝えているところです（※下段3）。

プロジェクトの第一歩は 地域を愛すること

友成 ここで、大学と地域の関係を整理しておきたいと思います。大学の視点から見ると、文部科学省は大学の使命を教育、研究に次いで、社会貢献であると言っています。しかし、今まで大学内でやってきた教育・研究と社会貢献のつながりがはっきりしていません。逆に地域の視点から見ると、地域を元気にするために大学の「知」を利用したいと思っていますが、何をもって地域が元気だと言えるのかが不明確なのです。体よく落とし込まれる答えは、その地域の企業が元気になるということですが、私は少し違和感を持っています。仮に企業を元気にするのであれば、大学に頼る



3. 佐賀プロジェクト

2006年12月に、大学創立125周年記念の事業推進、また、双方の連携強化のため「連携強化のための協働連携に関する基本協定」を大隈重信の故郷・佐賀県との間で締結。県庁政策監グループと社会連携推進室がカウンターパートとなり、両者の組織力を生かした広範囲な取り組みを実施。佐賀県職員が大学に長期間出向し、社会連携推進室において、実際の現場で各連携事業のコーディネートを行っています。九州「学びのメッカ」づくり事業では、佐賀新聞文化センターと連携し、本学教授等による出張講座や早稲田キャンパスからの遠隔配信講座を行っています。この他にも、佐賀市や唐津市、佐賀大学との連携も進めしており、佐賀県と本学との交流は、さらに幅広いものとなっています。

のではなく、お金を払ってコンサルタントに頼めばいいことです。さらにそこに行政が介在している意味は何でしょうか。地域を元気にするという論理が突き抜けていないので、すっきりしません。

吉田 私もそう思います。企業の経営能力を高めるには、大学が商学部やビジネススクールで経営者をしっかり育成すればいいことです。ただ、中小企業の経営者の中には、簿記が分からぬ人もいます。経済が好調な時には親から引き継いだ事業や不動産があるのでうまくいくかもしれません、こういう時代になるとたちまち破綻します。経営者教育は重要なと思いますね。例えば、吉田松陰の松下村塾はたった1年で、国を動かす人材を育成したんですよね。地域経済に30年間関わってきたが、一番の問題点は中小企業経営を教えてくれる人がいないということでした。

では、地域を元気にすることは何かと考えると、地域が持っているアイデンティティを大学の知が補完して強くしていくということではないでしょうか。例えば鹿児島は焼酎が有名ですが、鹿児島大学は日本の大学で唯一焼酎の研究所を持っています。活用しない手はないですよね。大学のシーズを使って地域のコアになる部分を育てていくという連携の形があると思います。

友成 地域が、自分たちのアイデンティティを分かっていないということが、最大の問題点ですね。意外と地元の人は自分たちの地域の価値を分かっていません。それを表出させて、共有して、価値を認めてあげることが必要です。これは地域経営論の本質的部分ですが、実はよそ者が関わらないとできないことだと思います。しかもそれができるのは、物事を本

質的に突き止め、他の地域の例を知っている人です。しかしコンサルタントは、アイデンティティというどちらかというと精神的な世界にゲット入り込んでいくことはできません。だからこそ、タコつぼ型の社会構造から離れたアカデミアである、大学が関わっていく意味があるのではないかでしょうか。

吉田 外部の人間だからこそ価値が分かるというのは同感です。不思議なことに地域連携が成功している地方の国立大学のキーマンは、みんな外部の人なんですよ。でもその地域をものすごく愛しています。私も大阪出身ですが大学は早稲田で横浜市役所に就職し、横浜のために一生懸命頑張っていますよ。

友成 墨田区に地域経営ゼミの学生を投入していますが、まず彼らに言うことは「墨田区を好きになってください」ということです。人と地域の関係は、その地域をいかに愛してエネルギーを投入できるかがすべてです。それが地域連携プロジェクトの第一歩だと思います。ですから、大学が地域連携をするのに、キャンパスのある地元にこだわる必要はないんですよ。

学生が地域連携で学ぶ 現実の課題を受け止める感性

奥山 先日、信州の木島平村に学生20人を連れて1週間行きました。フィールドワークを行って、過疎地を元気にするための提案をするというプロジェクトです。一人ひとりが家を訪ねて直接話を聞いて、最終日に村役場で発表しました。学生なので実現可能なソリューションを提案することは難しいのですが、学生たちがやって来てその村のことを一生懸命考えてくれたことで、村が元気になったそうで



佐賀新聞文化センターでの遠隔配信による講義風景



す。学生たちも目の色が変わって大きく成長しました（※下段4）。

友成 先ほど、吉田さんが松下村塾のことを言わされました。そこでは単に知識を詰め込むだけでなく、人間性を育てる教育が行われたんだろうと思います。地域が求めているのは、地域を経営できる人材を育てることですが、恐らく一番良い方法は、木島平のプロジェクトのように学生を地域に放り込んでしまうことですね。現実を目の当たりにすると、心に地殻変動が起き、地域をどうすればいいかを真剣に考えるようになります。地域側からすると学生がやってきて迷惑かもしれません。学生が前向きに地域のことを考えてくれることで、自分たちの心にも火がついて元気になるというプロセスがあると思います。まさに木島平の例は、大学で地域を経営する人材を育て、地域側もそのプロセスの中で元気になっていくというWin-Win関係が成立する可能性を示したと言えます。

奥山 昨年、アメリカの州立大学などを訪問しましたが、そこでも大学と地域社会の交流が盛んに行われていました。地域の企業やNPO、コミュニティの運営に学生が参加し、現実的な課題に取り組む教育スタイル（Authentic project program）を行っていました。そこでは、各々の学生が持っている個別の知識やスキルを統合して「実践知」といった能力を引き出すことが目的になっています。日産自動車やANA総研、信州木島平村のプロフェッショナルズ・ワークショップでもわかるように、企業や社会のフィールドにある現実の課題に向き合った時、学生は飛躍的に成長するんです。現実の課題を受け止める感性を育てることが、大学の教育に求めら

れています。

大学が人と人の交流を生む 推進役に

奥山 ところで、地域連携において早稲田大学の強みは何だと思われますか。

吉田 IDECが早稲田大学と連携したメリットは、一つは、総合大学としての知識と経験で、客観的なアドバイスをくれるということ。もう一つは、早稲田が持つ広域ネットワークです。横浜の経営者が墨田区の経営者と交流し、現場を見る能够性は、早稲田だからこそできることです。早稲田がこれまで培ってきたものを他の地域にどんどん広げていってほしいですね。

友成 早稲田には多様な文化と多様な資源があるので、いろいろな地域のアイデンティティを掘り起こすことができると思っています。

さらに、早稲田には社会連携推進室があって、大学の資源を地域に合わせて柔軟にコーディネートできる体制が整っています。先生と直接関係を結ぶと、その先生の専門分野に限定されてしまって、狭い範囲でしか連携することができません。これは他の大学にはない強みですね。

奥山 最後に、大学と地域の連携について、それぞれの立場から目指す将来像をお聞かせください。

友成 大学の立場から言うと、そもそも模範国民を造就することが教育の本旨ですから、教育の力をつけるために、地域や社会を活用していくことが必要です。その結果として、両者がハッピーになるようなプロジェクトがどんどん生まれ、早稲田大学の社会的な存在意義が高まっていくといいですね。



吉田 その通りですね。日本の閉塞感を開拓するための課題は人づくりしかないと思っています。そう考えると大学への期待は大きいですね。今、その潜在能力を最も持っているのは早稲田大学だと思います。

私は校歌3番の「集まり散じて 人は変われど 仰ぐは同じき 理想の光」という歌詞が好きです。要は、人が来ないところは衰退するが、必ずしもそこに止まる必要はないということです。人が動けば、情報も知も行き来します。地域を元気にするためにには人がコミュニケーションを図ることが不可欠で、大学がその推進役になっていくことを期待しています。

友成 「仰ぐは同じき 理想の光」の部分も大事ですね。大学がなぜ存在しているのか、なぜ地域と関わるのかという根本理念を共有していれば、集まり散じていいわけです。

人は、自分とは違う存在を愛し、エネルギーを注ぐことで成長します。大学も地域を愛し、エネルギーを注ぐことで成長し、その結果、その地域も元気になってWin-Winの関係になる。これが、大学と地域の連携の基本的な考え方になっていくのだろうと思います。



木島平村でのフィールドワークで、地元住民の話を熱心に聞く学生たち

4. 木島平・早稲田プロフェッショナルズ・ワークショップ

企業や自治体が直面する課題に、早稲田の学生チームが課題解決の提案を行うプロジェクト、「プロフェッショナルズ・ワークショップ」。2009年、長野県の北部に位置する木島平村の住民とともに、地域を活性化させるにはどうすればいいかを考え、学生チームが木島平村に提案する同ワークショップがスタート。8月2日～7日に実施した木島平村でのフィールドワークでは、村役場の職員の方々にも指導を受け、下高井農林高等学校生徒とも連携。10月、木島平村役場にて地域活性化につながる提案の後、木島平村にて開かれた農山村交流全国フォーラムで、最終発表が行われました。

Message to the next generation

第二世紀へのメッセージ →

早稲田大学に関係のある方にお話を伺い、
客観的な視点により、
早稲田大学の魅力や課題を浮き彫りにします。



写真=金子悟

小説家 **火坂雅志**さん

【プロフィール】

ひさか・まさし

1956年、新潟県生まれ。早稲田大学商学部卒業後、出版社勤務のち、1988年『花月秘挙行』でデビュー。2006年、「新潟日報」朝刊ほか全国13紙に、上杉謙信の義の心を受け継いだ直江兼続の生涯を描く『天地人』を連載し、同小説が2007年、第13回中山義秀文学賞を受賞。2009年に、NHK大河ドラマとして放映された。新史料をもとに描く旺盛な作家活動に定評がある。『全宗』『霸商の門』『黒衣の宰相』『虎の城』『沢彦』『臥竜の天』『美食探偵』『軍師の門』『墨染の鎧』など著書多数。

大学時代は、良きリーダーになるために 人間としてのふくらみを形成する時期

上杉謙信を師と仰ぎ、兜に「愛」の文字を掲げた戦国武将として知られる

直江兼続の人生を描いたNHK大河ドラマ「天地人」。

その原作者であり、これまでにも本格的な歴史小説を数多く書き続けてきた小説家、
火坂雅志さんに人生の夢を見つけた大学時代や歴史小説の魅力についてお伺いしました。

人生の夢を見つけた **「歴史文学ロマンの会」**

—どのような学生時代を過ごされましたか。

私の学生時代は、早稲田の周りは雀荘ばかりで、夕方になるとお酒を飲んで、麻雀をしてという日々を送っていました。その頃の学生はみんなそんな感じだったのでないでしょうか。しかし、そんな生活にピリオドを打つことになった衝撃の出会いがありました。それが、「歴史文学ロマンの会」です。ある日、「君も龍馬、信長と語り合いませんか?」というキャッチフレーズが書かれたポスターをみつけたんです。私は高校生の頃に、世界史の教科書の間違いを発見したこと

があるくらい、歴史は身近な存在だったので、当然のようにサークルに入会しました。読書会で、私が歴史小説家になることを決意した司馬遼太郎氏の『燃えよ剣』にも出会いましたし、サークルの人たちには感謝しています。「歴史文学ロマンの会」はその後衰退して今はもうなくなってしまったのですが、ぜひ復活してほしいですね。

『燃えよ剣』のような小説を書きたいと一念発起してからは、図書館にこもりっぱなしになりました。明治時代以降の歴史小説を全部読むという覚悟を持って、猛烈に歴史の勉強を始めましたが、早稲田の図書館は、調べても、調べても膨大な資料が出てきました。図書館通いは社会人になってからも続けていましたが、5年くらい前に私が調べていたテーマに関して調べるもののがなくなったんです。制覇したという感じがして、嬉しかったですね。早稲田の図書館がなければ、ここまでやれなかっただと思います。

その他、学生時代から古本屋通いもしていました。早稲田はもちろん、全国の古本屋をしらみつぶしに回りました。そのうち、その店に必要な本があるかどうか、店の前に立つだけで嗅覚がきくようになり、手に取ってわずか数秒で購入を決めてしまうので、業者に間違われるほどになりました。今思い返しても、あの図書館通いと古本屋めぐりが、私の原点になっています。

—今の学生さんに伝えたいことはありますか。

学生は、夢を持つことが大切です。自分の夢をじっくり考えることができるのは、時間のある学生時代だけなんですよ。夢は、努力し続けていれば必ず叶います。夢が叶わないのは、夢を捨てているからです。さらにみんなが気付いていないのは、夢を達成した後のほうです。夢が叶った後、慢心せずに努力を続けることのほうが難しいんです。

私の場合は、念願叶って歴史小説家になった後、なかなか本が売れませんでした。20年で60冊以上出し続けてもヒット作は出ません。しかし、そのことが逆に私のモチベーションを保っていました。好きな歴史小説を書き続けるために、どうしたら人々から目を向けてもらえる小説を書けるのかを考えて、一歩一歩進んできました。武田信玄の言葉に「六分七分の勝は十分の勝なり」というものがあります。最初から九分十分成功すると慢心してしまい、反省しなくなる。六分七分の成功が丁度いい。という意味です。ものすごい至言ですね。私の座右の銘です。

子どもたちには、 自由な発想ができる環境を

—歴史小説の魅力とは何でしょうか。

少し前までは、サラリーマンがいかに成功するかを歴史に学ぶというビジネス書としての歴史読み物が幅をきかせていましたが、最近は歴史雑誌の特集も変わってきました。世の中の風潮として、出世したりお金を儲けたりすることではなく、自分らしく生き、志を貫くということに価値が置かれるようになって、歴史上の人物にもそんな視点で注目が集まるようになってきたんですね。最近“歴女”が現れましたが、彼女たちに一番人気があるのは、真田幸村。彼は最終的には戦に負けて、決して成功しているわけではありませんが、自らの生きざまを貫いた姿が愛されています。女性のほうが素直に歴史を見ているような気がします。そんな読み方も面白いと思いますよ。

—歴史では藩校が重要な役割を果たしてきたと思いますが、今、早稲田大学は高等教育機関として、どのような役割を果たしていくべきだと思われますか。

私は教育者ではないので分かりませんが、情けのある人間を育てていくべきだと思います。現代社会に必要なのは、“仁”、弱き者を助ける気持ちです。昔からリーダーになる人間に最も必要な資質だと言われています。学生時代は、ただ学問をするだけでなく、人間としてのふくらみを形成していくほしいですね。

—火坂さんは、学生の親御さんと同年代ですが、何かメッセージをお願いします。

自分の親のことを思い出してみると、とにかく自由にのびのびと好きなことができる環境を作ってくれたと思います。子どもは意外に親のことを考えているので、うるさく言うと萎縮してしまいます。萎縮した状態というのは、子どもにとつて一番辛いことです。大人だってそうですよね。親がしてあげられることは、子どもが自分の力を發揮し、自由な発想を生み出せるような環境を作つてあげることではないでしょうか。



直筆の色紙を手に

プロ・ローグ



国際学術院
桜井啓子教授

プロフィール

さくらい・けいこ

1959年、東京都生まれ。上智大学文学部史学科卒業後、上智大学大学院外国語学研究科博士課程修了。明治学院大学国際平和研究所研究員、学習院女子大学助教授・教授を経て、2004年より現職。主な著書に『現代イラン―神の国の変貌』(岩波新書)、『シア派一派頭するイスラーム少数派』(中公新書)など。

原点に戻つてイランと向き合いたい。
社会の変動を探る
イスラーム体制下での

高

校三年生の夏、近所の図書館で開いた一冊の写真集が、はじまりでした。サーサーン朝ペルシアの都イスファハーンのモスクの計算されつくした造形美と、人とモノで溢れかえったバザールの、なんともいえないコントラストが印象的で、その魅力に取り憑かれてしまった私は、「ペルシア史」を学ぼうと史料学科に入学しました。ところが、入学して1年もたたないうちに、「美しいペルシア」で革命が起きたのです。2500年の歴史を誇った王制は崩壊し、宗教指導者が統治する「イラン・イスラーム共和国」が誕生しました。この驚きと衝撃が、思いがけないパワーを与えてくれました。なぜ革命が起きたのだろう、なぜ「イスラーム」革命なのか、どうして宗教指導者が政治に進出できたのか。次々と疑問が湧き上がるのですが、当時は「イラン」も「イスラーム」も、実にマイナーなテーマで文献も十分ではありません。少しでもイランに近づきたいとペルシア語もはじめましたが、疑問は増えるばかりです。結局、将来のことにも考えず、勉強を続けたい一心で大学院に進学してしまいました。革命から30年の歳月が流れましたが、今なお、イランという巨大な謎を追い続ける日々です。

しかし、イランやイスラームを取り巻く環境は、当時から大きく変わりました。冷戦後、「イスラーム」は、ソ連に代わる西側世界の新たな「敵」となってしまったからです。さらに2001年の9.11事件以後は、「テロ」という言葉が加わって、惨憺たる扱いを受けるようになりました。皮肉なことに、イスラーム地域研究の必要性は、こうした負の出来事がきっかけとなって、しだいに認められるようになったのです。昨年、早稲田大学にイスラーム地域研究機構が開設されたのもその一例です。中東やイスラームについて学びたいという学生は着実に増えていますが、その分、責任が重くなったと感じています。世界人口の2割はイスラーム教徒という時代です。イスラーム教徒が多く住む地域で起きる事件や出来事が、あたかもみな「イスラーム」に起因するかのような言説が、

今だに横行しているのは残念です。イスラームのとらえ方や実践は、国、地域、個人によってさまざまです。イスラーム教徒が、みな同じ考え方をもっているはずもありません。先入観にとらわれず柔軟な思考と感性で、イスラーム地域に向か合ってもらうためにはどうすればいいのか、試行錯誤の連続です。

私は、2004年、国際教養学部の開設時に早稲田に赴任しました。語学力に秀で、効率よく試験や課題をこなすことのできる学生が多いことに感心しています。ただインターネットで検索して、短時間で見栄えの良いレポートを作成するといったことが一般化しているためか、じっくりと問題に向き合う機会が少ないことが気がかりです。社会的な想像力や感性を養うためには、興味を持ったテーマへの持続的な取り組みや自発的な読書が必要です。

私自身は、近年の研究関心が日本に暮らすイスラーム教徒の状況やイスラーム教シア派の動向など、イランから離れ気味でしたので、そろそろ原点に戻って、再びイランと向き合いたいとおもっています。イランでは、6月に行われた国会議員選挙における不正疑惑が発端となって、強権的な体制に不満を持つ若者、特に大学生による抗議行動が続いています。逮捕者が出ていているにもかかわらず運動が鎮静化する気配はありません。すでにイランの大学生の半数以上は女性です。90年代末から女性の進学者数が男性を超えてづけてきたためです。このままでは男子学生がいなくなるという危機感から、昨年、性別入試枠が導入されました。イスラーム体制下で女性が男性を圧倒しているという現実。これを切り口にイラン社会の変動を探っていこうと思っています。

▶イランで集めた小物。
奥から時計回りに、瑠璃花瓶、ミニチュアのコーラン(赤・緑)、シア派五聖者(手形)、シア派初代イマーム・アリーの剣、アリーの姿入りペンダント。メッカの方角を探すキブ・コンパス、タスビーフ(イスラーム教徒用数珠)。

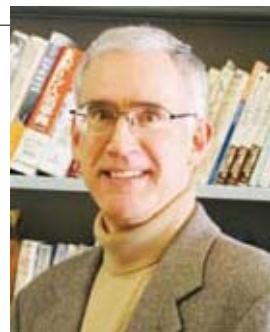


A WASEDA Miscellany

本学外国人教員が、自らの研究のこと、
趣味や興味あることなど日々の雑感を語ります。

Lee Thompson

Professor, Faculty of Sport Sciences



Profile

Born in 1953, Oregon, USA. Attended Lewis and Clark Born 1953 in Oregon, USA. Attended Lewis and Clark College in Portland Oregon, majoring in communication. Ph.D. in Sociology from the Graduate School of Human Sciences, Osaka University. Assistant in Department of Human Sciences, Osaka University; associate professor at Osaka Gakuin University; currently professor at the Faculty of Sport Sciences.

This theme : **Learning Through Questioning**

I have resided in Japan for over 30 years, mostly in the Kansai area. I have lived in Sapporo, Tokyo (Mitaka, Meguro, Bunkyo-ku), Nagoya, Kyoto (Tanabe-shi and Nishikyo-ku), Osaka (Toyonaka and Hirakata), and Kobe (Rokko Island). I currently live in Tokorozawa, and by the time you read this I will have moved to Nishi Tokyo! I have traveled to all four of the main islands of Japan plus Okinawa and a few smaller islands (Awajishima, Yakushima, etc.) I must have seen more of Japan than my native America!

This is my seventh year at Waseda. I came here to teach about sport and the media at the School of Sport Sciences, which was established in 2003. In my experience Japanese students participate less in class than their American counterparts. After every lecture I always ask for questions, but the students rarely ask any. After lecturing for over an hour, it can be a little discouraging when there are no questions and therefore no discussion. Without questions, it's impossible to know how much they understand. So now, in order to have some sort of communication, I hand out blank pieces of paper at the end of class and ask the students to write their questions and hand them in. It's funny: although they are apparently reluctant to ask their questions out loud, when given the opportunity to write them down they do have questions after all. At the beginning of each class I take up a few of the questions from the previous week before moving on to the day's topic.

I really enjoy getting questions. Waseda students usually ask very good questions that make me think, which helps me hone my own ideas. I just wish more students would voice their questions in class when given the opportunity. I wonder why they don't? I suspect that it's a result of their previous education. Perhaps they haven't had the opportunity to ask questions in class, or haven't been encouraged to speak their opinions. Of course, it's easy to blame the students. I need to ask myself if I am doing everything possible to create an atmosphere in the classroom that is conducive to discussion.



At the graduation ceremony,
March 2008 (ゼミ生と)

Carnival fun!

Here I am in my costume for the Carnival season in Cologne, Germany, where I recently spent a sabbatical year. Over one million people dress up in costumes and celebrate in the streets at the peak of Carnival, which usually takes place in February. At first I was embarrassed to leave the house dressed up like this, but once I got out on the street and saw that most other people had even more outlandish costumes than mine, I began to feel embarrassed for the opposite reason: I was underdressed!



Trend Eye

このコーナーは、教育ジャーナリストとして活躍中の山岸駿介氏による教育問題に関する連載コーナーです。

プロフィール

やまぎし・しゅんすけ
1958年 新潟大学人文学部法律学科卒業。新潟日報、朝日新聞記者を経て、多摩大学教授（教職課程）。定年退職後、昨年まで客員教授。1968年 大宅壮一東京マスコミ塾第一期生・優等生。1970年 新聞連載「明日の日本海」で菊池寛賞受賞。教育ジャーナリストとして活躍。「大学改革の現場へ（玉川大学出版部刊）」など著書多数。



『「勉縮」のすすめ』と東京大学

危機感に溢れた提言

汗牛充棟の何乗と言っても足りないほど教育書の数が多い。だが書かれていることのユニークさといい、発表後に高まった社会的評価といい、朝日新聞の論説主幹やアメリカ総局長を勤めた松山幸雄氏の書いた『「勉縮」のすすめ』ほど、優れた労作を私は知らない。『「勉縮」のすすめ』は、松山氏が実際に経験し、感じたことに基づいて書かれており、日本の子供や若者が受験勉強第一の学習をしていては、大人になってから欧米のエリートたちに遅れをとり、国際社会で勝ち残れないという危機感に溢れている。

アメリカでは、親が金持ちでも子供には関係ない。たいていスーパーマーケットの会計係や新聞配達、ベビーシッターをやっている。知人の学生結婚した夫婦は、夫人が勤めに出て、亭主は学位論文執筆を始めた。男の実家は大金持ちだが知らん顔をしている。人間というものは、環境に恵まれすぎると、向上心がストップしてしまう。子供も大人もその点は変わらない。

そうした場合、金をやるか、やる気の方が大切と考えるか。日米を比較すると、日本人は金をほしがる。アメリカ人は金が人間をスパイラルすることを知っており、金ではなく、仕事をやる気を大切にする、そういう気持ちをなくさないとの方が大切だと考えることの方をと

る。だから親が亡くなり、財産を分与するまでは、子供は働き続けなければならない。

東京大学の人材を憂う

日本人。とくに優れたインテリはこういう外国人と国際社会で闘わねばならないのである。優れたインテリと特定すれば、すぐ東京大学が問題になる。東大の教育がどうなっているか。とくに独立行政法人化で東京大学の地位は、一段と屹立し、他大学には目もくれない。その東大が、どんな学生を入学させているかといえば、入学試験の仕方は、受験産業の東大入試情報を見る限り、従来と基本的には変わっていない。

東大の教授や、東大で生産された日本人教授も含めて、教える学者の方も、外国人に太刀打ちできる人材はほとんどないことになると考えてよかろう。

危機感を伝えるべき 朝日新聞

平成21年11月23日（勤労感謝の日）に東京大学安田講堂で行われた日本学術会議と朝日新聞社主催の公開シンポジウム「大学教育の分野別質保証に向けて」を傍聴する限り、なぜ『「勉縮」のすすめ』を見ずに報告書を作ろうしているのか、松山氏が勤めあげた朝日新聞社が主催するシンポジウムなのに

…、と思わず呼びたくなるような学生教育論が語られていた。

私もかつては朝日新聞に二十年勤めた身として、硬直化している社員の姿に身も凍る思いがした。

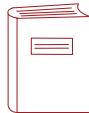
『「勉縮」のすすめ』は出版するとすぐ朝日文庫でも発売された。文庫本は学術会議のシンポジウムが開かれる直前まで売られていた。他人に上げようと思い、買おうとしたら「絶版になりました」と断られた。売り切れたのを機に増刷をやめたらしい。

いったい朝日新聞というのは、どういう会社なのか。これだけ意味のあることを伝え続けてきた本の千や二千部を増刷して世間に危機感を伝えることぐらい、受験勉強・格差社会が大問題になっているいまの状況の中で、どれほど意味のあることか、考え方かぬことはあるまい。朝日の幹部たちは、どう考えているのか。

朝日批判に終始してしまったが、他紙と比べれば、やはり朝日、と思って甘受してほしい。



Books



本学で活躍される先生方の著書をご紹介します。
※（ ）内は著者・編者・監修者の所属です

今号のオススメ

『「可視化」のジャーナリスト 石橋湛山記念 早稲田ジャーナリズム大賞記念講座2009』

花田達朗（教育・総合科学学術院）コーディネーター
早稲田大学出版部
2009年11月刊



今日、ジャーナリズムはそもそも必要とされているのか——？ 近年「マスコミ」の評判低下が著しい。そのなかで蠹く大多数の「マスコミスト」たちの生態は、もう見透かされているのだ。しかし、「ジャーナリスト」は違う。ジャーナリストとは「ジャーナリズム」という「イズム」の担い手であり、実践家である誇り高き「少数者」なのだ。彼らは譲れない原則を胸に「個」として闘い、「抑圧された事実」を解放する「可視化の職人」である。

『2009年、なぜ政権交代だったのか—読売・早稲田の共同調査で読みとく日本政治の転換』

田中愛治・河野勝・日野愛郎（以上、政治経済学術院）・
飯田健（高等研究所） 読売新聞世論調査部共著
勁草書房
2009年10月刊



2009年8月の国民自らの手で起った戦後最大級の政治変動。読売新聞の世論調査部と本学グローバルCOEプログラム「制度構築の政治経済学」によるコラボレーションで、その真因をここに明らかにする。

■『規制影響分析 (RIA) 入門—制度・理論・ケーススタディ』

山本哲三（商学学術院）編著 NTT出版 2009年7月刊

■『安全学入門—安全の確立から安心へ—』

小松原明哲（理工学術院）共著 研成社 2009年8月刊

■『世界史的考察』

新井靖一（名誉教授）訳 筑摩書房 2009年8月刊

■『環境政策の政治学—ドイツと日本』

坪郷實（社会科学総合学術院）著 早稲田大学出版部 2009年9月刊

■『スタンダード管理会計』

小林啓孝・伊藤嘉博・清水孝・長谷川恵一（以上、商学学術院）共著
東洋経済新報社 2009年9月刊

■『入門 金融の現実と理論—基礎から金融危機までわかる』

谷内満（商学学術院）著 センゲージラーニング／同友館 2009年10月刊

■『地下利用学—豊かな生活環境を実現する地下ルネッサンス』

小泉淳（理工学術院）編 技報堂出版 2009年10月刊

■『読者はどこにいるか—書物の中の私たち』

石原千秋（教育・総合科学学術院）著 河出書房新社 2009年10月刊

■『モンキーブリッジ』

麻生享志（国際学術院）訳 彩流社 2009年10月刊

■『あの作家の隠れた名作』

石原千秋（教育・総合科学学術院）著 PHP研究所 2009年11月刊

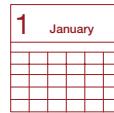
■『大五郎先生の書の年賀状』

渡部大語（大学総務部）編 天来書院 2009年11月刊

■『ファシズムを超えて—政治学者の戦い』【新版】

堀真清（政治経済学術院）訳 早稲田大学出版部 2009年11月刊

Events



本学で2010年2月までに開催されるイベントを一部ご紹介します。

詳細は、直接【問合せ先】にご確認ください。その他のイベントにつきましては、本学Webサイト (<http://www.waseda.jp/>) をご覧ください。

會津八一記念博物館 展示

①旧富岡美術館の近代画 ②陶片に見る古伊万里窯—竹大コレクションより

③中原淳一と《少女の友》の画家たち—内山美樹子・伊藤美和子寄贈作品展—

会場 ①會津八一記念博物館富岡重憲コレクション展示室 ②會津八一記念博物館常設展示室 ③會津八一記念博物館1階企画展示室

日程 ①1月6日(木)～2月4日(木) ②1月12日(火)～3月25日(木)※2月5日(金)～28日(日)は休館 ③1月25日(月)～2月4日(木)

①田能村直入の山水図屏風をはじめ、雅邦・関雪・玉堂などの日本画、矢部友衛・満谷国四郎等の油彩画を展示する。

②竹大和男氏が永年にわたって調査研究され、2008年当館に寄贈された古伊万里作品と陶片の展示。今回は肥前檍伐桐窯のものを中心。

③文学学術院の内山美樹子教授をとおして本館に寄贈された〈内山基コレクション〉の展示。中原淳一の『少女の友』表紙原画など、少女たちを魅了した世界を紹介する。

問 會津八一記念博物館 TEL: 03-5286-3835
<http://www.waseda.jp/aizu/index-j.html>

EUと日本—これからの10年

(EU-Japan: The coming decade)

会場 早稲田大学国際会議場 井深大記念ホール

日程 1月12日(火) 10:40～12:30

「今後の日欧関係の未来像について、本学出身の河野洋平前衆議院議長と学生が対話するイベントを開催します。河野氏のほか、EUの高官も参加します。

問 EUIJ早稲田 運営事務局 TEL: 03-5286-8568
E-mail :EUIJ@list.waseda.jp

演劇博物館 演劇講座

①並木宗輔展演劇講座「奥州秀衡有聲壇」を聞く

②太田省吾展関連演劇講座

会場 早稲田キャンパス6号館3階318室（レクチャールーム）

日程 ①1月12日(火) 14:00～16:00 ②1月15日(金) 18:00～20:00

①17年前に本学で復曲上演された『奥州秀衡有聲壇』を、GCOE客員講師川口節子氏の解説で鑑賞いただきます。現行の文楽では上演されない珍しい演目の貴重な音源です。

②演出家・劇作家太田省吾の劇世界について、生前の太田の活動に精通されている八角聰仁氏を講師にお招きし、映像資料を紹介いただきながら語っていただきます（講師：八角聰仁氏 受講料：無料）。

問 演劇博物館 TEL: 03-5286-1829
<http://www.waseda.jp/enpaku/index.html>

演劇博物館 企画展

①並木宗輔展—淨瑠璃の黄金時代— ②現代演劇シリーズ第34弾「太田省吾展—人生の「地」と「図」をみつめて—」

会場 ①演劇博物館2階企画展示室1 ②演劇博物館2階企画展示室2、3階「現代」コーナー

日程 ①開催中～1月31日(日) ②開催中～2月5日(金)

①近松門左衛門以降の人形淨瑠璃界を支えた代表的な作者、並木宗輔。「仮名手本忠臣蔵」は現在でも繰り返し上演される並木宗輔の仕事と生涯を、貴重な資料とともに展示。

②「沈黙劇」という独自のスタイルを確立した太田省吾。上演資料や舞台写真、自筆原稿を通して太田の多岐に及ぶ仕事をご紹介いたします。

問 演劇博物館 TEL: 03-5286-1829
<http://www.waseda.jp/enpaku/index.html>

川崎九淵没後五十年をしのんで

会場 大隈小講堂

日程 1月23日(土) 14:45～16:45

能楽界初の人間国宝、葛野流大鼓方川崎九淵の没後50年にあたり、その名人藝を貴重な録音から偲びます。演博に寄贈された九淵の大鼓胴も会場に展示。

問 演劇博物館 TEL: 03-5286-1829
<http://www.waseda.jp/enpaku/index.html>



早
稻
田



表紙写真：佐藤洋一
(芸術学校客員准教授)

Rediscovery of WASEDA

再発見

cover story
表紙のお話

キャンパスの中の風致。

大隈庭園の庭木の奥、

ここが都会のキャンパスだということをしばし忘れさせる空間があります。

1952年、校友の小倉房藏氏（1908年商科卒）から寄贈された「完之荘」。

飛騨の山村に残っていた700年以前の建築と言われる古民家を、

氏が渋谷の自邸内に移築し日常静閑の座所として愛用したもので、

その名称は氏の雅号「完之」に因みます。

栗材の柱はすべて直接礎石の上に立ち、梁とともに仕上げは手斧目で鉋削りではなく、

釘打も一切使わず、囲炉裏、火棚、自在鉤、縁先の手水や石門等は旧のままで、

建築学上貴重な資料でもあります。

引戸を入れると土間、その障子の先の広間は、校友や大学関係者の会合の場ともなっています。

CAMPUS NOW

【キャンパス ナウ】2010年1月1日発行 通号189号

※本誌記事を無断で転載等する事を禁じます。

■発行 早稲田大学 広報室広報課◎
〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104
Tel: 03-3202-5454 e-mail: koho@list.waseda.jp

■制作協力 産業編集センター

※CAMPUS NOWは年5回発行の予定です。次号は、2月下旬発行を予定しています。

『CAMPUS NOW』は WASEDA ON LINE でもご覧になれます。

■日本語版 URL <http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/>

■英語版 URL <http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/dy/>

小誌へのご意見、ご感想を募集しています。左記発行元まで、お寄せください。